

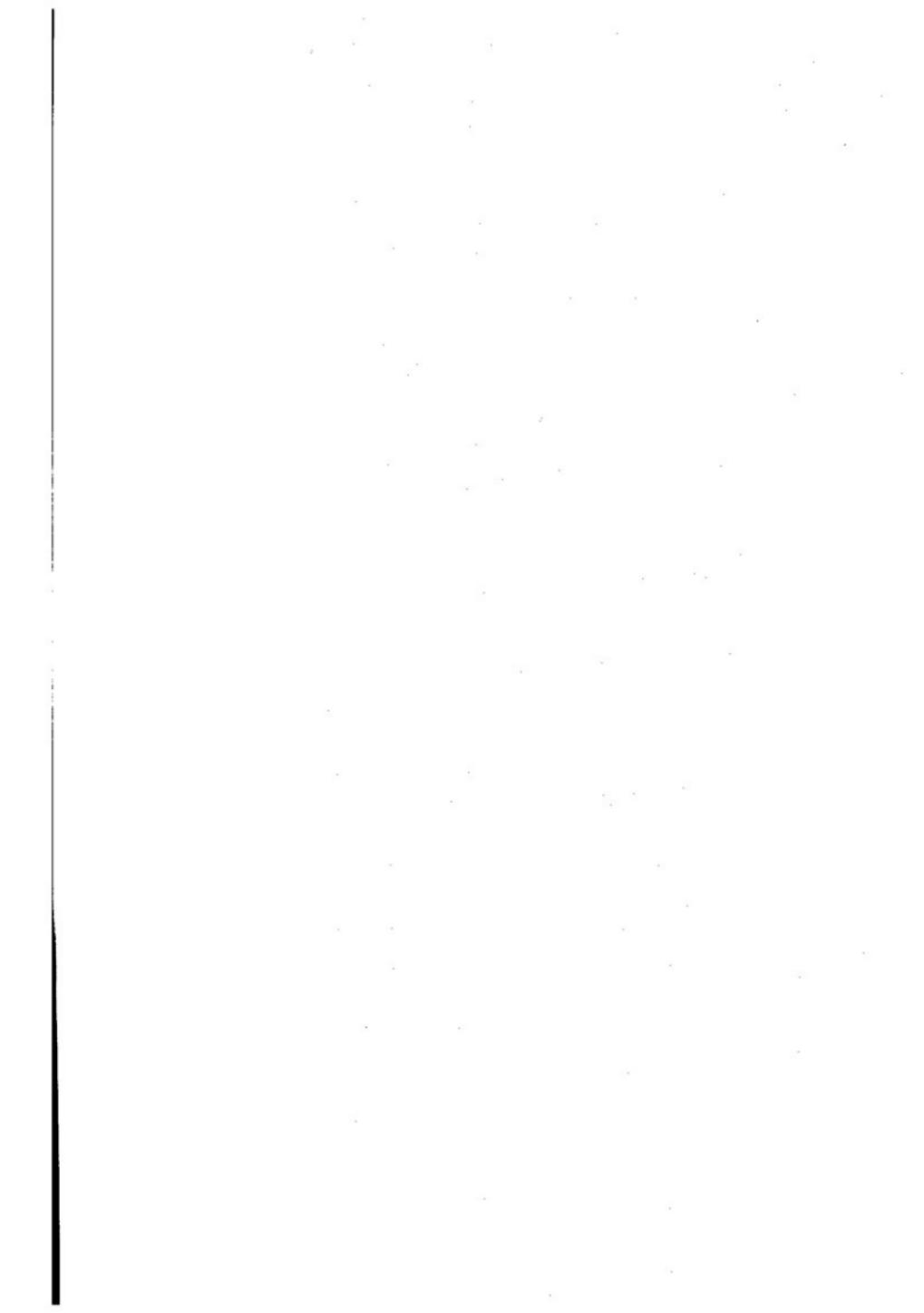
とうろく たかだ

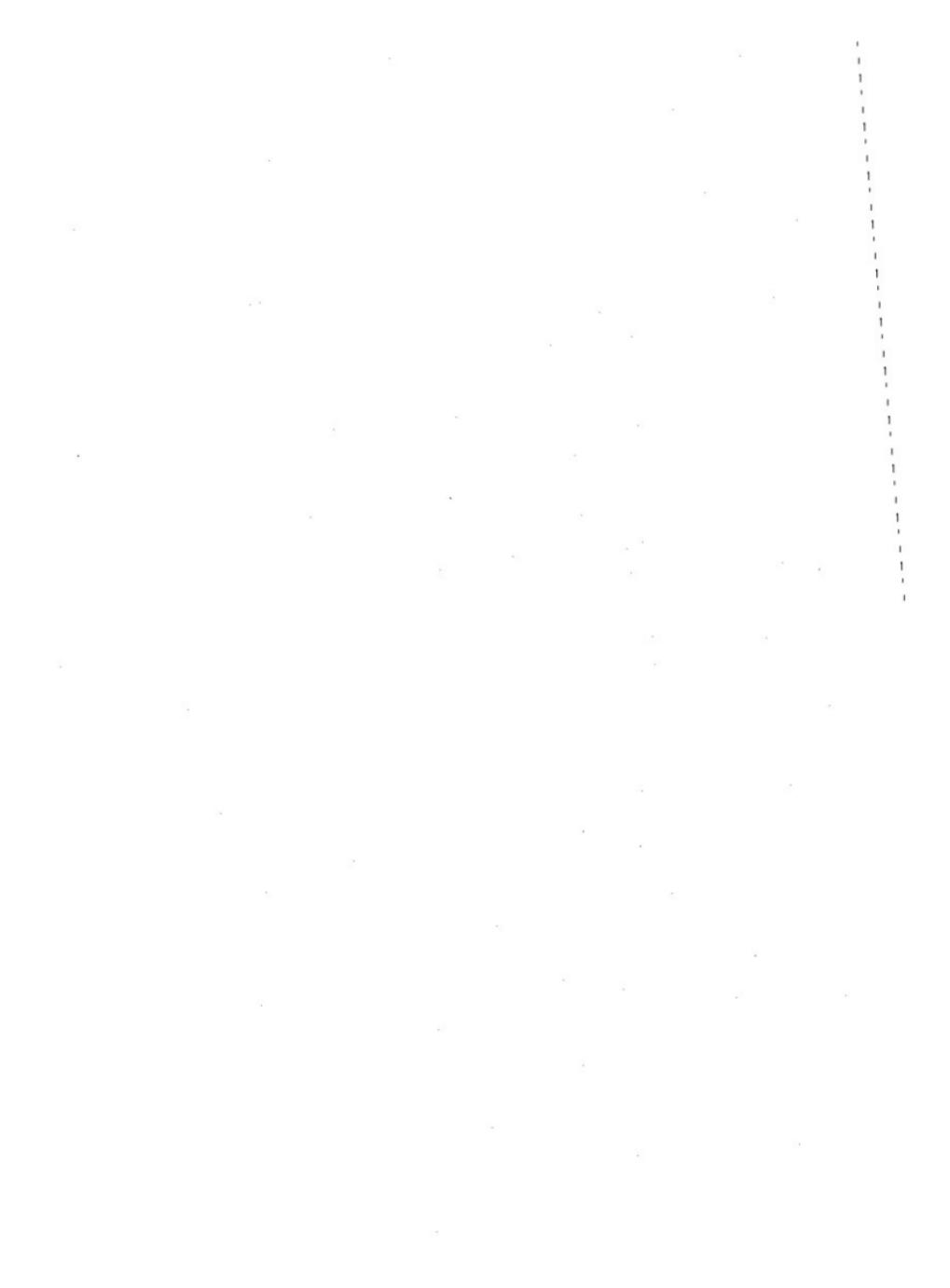
# 藤六3号墳・高田遺跡

発掘調査報告書

1990

掛川市教育委員会







とうろく  
藤六3号墳・高田遺跡

たかだ

発掘調査報告書

1990

掛川市教育委員会



## 序

掛川市域においても自然環境が少しづつではありますが失われつつあるのが偽りのない現実の姿であります。そして農耕に適していることから社会的要請などにより各種の開発行為の対象となり、しだいに自然の美しさは変貌してきております。また、恵まれた風土であることから市域全体に貴重な遺跡が包蔵されていることでも広く知られております。

なかでも掛川市西城を流れる原野谷川によって形成された流域の段丘のなかで、特に右岸の和田岡地域一帯の南北に長い河岸段丘上には既に縄文時代には社会が発展し、繁栄した跡がみられ、それにつづく稻作を生業とした弥生時代を経て、大規模な前方後円墳を築き、古代国家の確立に力を支えた古墳時代、その後も連綿として長い歴史が続いていることが、これまでの遺跡の発掘調査から明らかになりました。

このたびの発掘調査は和田岡地域のうち高田地区の通称、八塚と呼ばれる大型の古墳群が所在していたといわれる地点の一部がその対象となりました。和田岡地域全体が重要な地理的また歴史的な条件を備えている貴重な遺跡包蔵地であることから、本地点においても所有者の深いご理解とご協力をいただき、周到な準備のうえ、慎重を期して実施されました。

その結果、弥生時代の住居跡群、掘立柱建物群、古墳時代の円墳群、土壙群、溝状遺構、近世の道状遺構などが発掘され、原始、古代から近世までの長い歴史をひとくのに近くことのできない貴重な資料を得ることができました。

遺跡の発掘調査が、その地域にとって歴史的に貴重な文化財として、さらに多くの人々が遺跡の保存に関心をいただく契機になれば意義深いことであります。これまで、自然環境の保全とあわせて遺跡の保存に意をそいできた地域の人々に対して、将来の地域発展、ひいては市全体の発展につながる文化的諸要請などに積極的にこたえる条件整備への配慮即ち行政全体の文化化、いいかえれば、生涯学習理念の具体化が求められていることに率直に耳を傾ける必要があるかと思います。

最後に、本書の刊行にあたり関係者各位の御指導に対し、厚く御礼申し上げます。

平成2年3月

掛川市教育委員会  
教育長 西ヶ谷免志雄

## 例　　言

1. 本書は、平成元年11月13日から平成2年3月31日まで実施した静岡県掛川市吉岡字真黒坂1,231外に所在する藤六3号墳・高田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、高田遺跡地内で計画された茶園改植に先立つ緊急の発掘調査で、国および静岡県の補助金を得て掛川市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査にあたり、土地所有者の大場浩氏をはじめ周辺の土地所有者の方々には、文化財保護に対する深い理解とご協力を頂いた。
4. 発掘調査は、掛川市教育委員会の松本一男が担当した。
5. 発掘作業ならびに整理作業には、次の方々の参加を得た。  
鈴木辰江・村松さと・鈴木はづ子・宮崎充子・上村のり子・小沢ろく・荻田みさ子・荻田ちか牧野すみ江・豊田八重子・椿葉農子
6. 本書作成にあたり、次の方々からご教示・ご協力を得た。記して感謝の意を表したい。  
平野吾郎・吉岡伸夫・渋谷昌彦・松井一明
7. 本書作成にあたり掛川市教育委員会の前田庄一・戸塚和美ならびに市内在住の大熊茂広君の協力を得た。遺構のトレースと鉄器の実測・執筆を前田が、遺物の実測・トレース・執筆を戸塚が、そして遺構のトレースを大熊がそれぞれ行い、本書の編集・執筆を松本が行った。
8. 発掘調査事業業務は、掛川市教育委員会教育長西ヶ谷免志雄、社会教育課長安達啓、社会教育課専門官岩井克允のもとに社会教育課が所管した。
9. 調査によって得た資料は、すべて掛川市教育委員会が保管している。

## 凡　　例

1. 挿図における方位は、磁方位を示す。(1989年11月現在)
2. 本書で使用した遺構名称は、次の意味である。  
S B : 穫穴住居跡 SD : 溝状遺構 SF : 土壙 SH : 掘立柱建物跡  
SP : 小穴 (ピット)
3. 本書で使用した遺構番号は、現地調査時に呼称した番号をそのまま使用した。
4. 遺物の番号は、挿図と写真図版と同一である。

# 目 次

序 文	
例 言	
凡 例	
I 発掘調査と遺跡の概要	2
1. 調査に至る経緯と調査の目的	2
2. 調査の方法と経過	2
3. 遺跡をめぐる環境	4
II 調査の内容	5
1. 遺構	5
(i) 壺穴住居跡	5
(ii) 掘立柱建物跡	8
(iii) 土 壁	14
(iv) 小 穴	18
(v) 溝状遺構	22
2. 遺物	28
(i) 土 器	28
(ii) その他の遺物	28
III ま と め	31

## 挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置と周辺遺跡分布図	1
第2図 遺跡の周辺地形図	3
第3図 遺構全体図	6
第4図 SB01・SB02実測図	7
第5図 SB01・SB02Pit土層断面図	8
第6図 SB01実測図	9
第7図 SB03実測図	10
第8図 SH01実測図	11
第9図 SH02実測図	12
第10図 SF01実測図	13
第11図 SF02実測図	14
第12図 SF03実測図	15
第13図 SF04実測図	16
第14図 SF05実測図	17
第15図 SF06実測図	18
第16図 SF07実測図	19
第17図 SP4実測図	20
第18図 SP39・SP44実測図	21
第19図 SD05実測図	23
第20図 SD05遺物出土状況図	24
第21図 SD06実測図	25
第22図 SD07実測図	26
第23図 SD09・SD10実測図	27
第24図 出土遺物実測図（1）	29
第25図 出土遺物実測図（2）	30

## 図版目次

- 図版I 上 調査前近景（南から）  
下 調査区完掘全景（南から）
- 図版II 上 調査区完掘全景（北から）  
下左 重機稼動風景（掘削）  
下右 重機稼動風景（埋戻し）
- 図版III 上 SB01・SB02床面検出状況（東から）  
中 SB01・SB02完掘（北から）  
下左 SB01炉  
下右 SB01炉（完掘）
- 図版IV 上 SB03完掘  
中 SB03出土遺物近景  
下 SF01完掘（南東から）
- 図版V 上 SF02完掘（東から）  
中 SF03完掘（南から）  
下 SF04完掘（南東から）
- 図版VI 上 SF05完掘（南東から）  
中 SF07完掘（東から）  
下 SF07遺物出土状況
- 図版VII 上 SP4検出状況（東から）  
中 SP4完掘（東から）  
下 SP39完掘（北西から）
- 図版VIII 上 SP44遺物出土状況（北西から）  
中 SD06完掘（東から）  
下 SD07完掘（東から）
- 図版IX 出土遺物（1）
- 図版X 出土遺物（2）





1. 高田遺跡
2. 八海山
3. 又太郎
4. 長福寺西
5. 古城
6. 後藤ヶ谷
7. 中山
8. 城ノ腰
9. 東原
10. 今坂
11. 溝ノ口
12. 高田上ノ段
13. 吉岡下ノ段
14. 吉岡原
15. 濑戸山II
16. 濑戸山I
17. 花ノ腰
18. 濑戸山III
19. 女高
20. 平田ヶ谷
21. 石原沢
22. 境前
23. 東山
24. 金鉄原(久能山)
25. 陣屋北
26. 殿ノ台
27. 岡津原I
28. 二反田
29. 本郷の横穴群
30. 吉岡大塚古墳
31. 春林院古墳
32. 行人塚古墳
33. 亂塚古墳
34. 各和金塚古墳
35. 長福寺古墳群
36. 吉岡下ノ段古墳群
37. 吉岡原古墳群
38. 東登口古墳群
39. 谷房ヶ谷

第1図 遺跡の位置と周辺遺跡分布図

# I 発掘調査と遺跡の概要

## 1. 調査に至る経緯と調査の目的

高田遺跡が所在する和田岡原（各和原・高田原・吉岡原）には、直径30mの円墳春林院古墳・全長40～60mを越える前方後円墳大塚古墳・瓢塚古墳・各和金塚古墳・行人塚古墳と数多くの中小円墳で構成される和田岡古墳群が存在する。それ故高田遺跡の周辺には、縄文時代から古墳時代にかけての遺跡が多数集中して存在する。（第1図・第2図参照）。

これら遺跡地の多くは現在茶畠として利用されているが、近年しばしば茶園改植（茶の品種改良に伴い、畑の水はけを良くするために地表土と地山土とを転換するいわゆる“天地返し”が行われることが多い）により、遺跡の一部に思わぬ被害をもたらす事態が生じている。

掛川市教育委員会では、茶園改植に伴い消滅の免れない状況となった遺跡に対し、せめてもの措置として、遺跡の記録保存を目的とした発掘調査を実施している。

今回調査の対象となった地点では、平成元年2月4日夕刻地主の大場浩氏から「茶園改植の準備で畑で作業をしていたら、古い刀のようなものが出たので見に来てほしい」旨の連絡があり、掛川市教育委員会職員が現地へ急行。それが、鉄製の直刀（第25図25）であることを確認。『掛川市遺跡地図』により出土地点が、藤六3号墳地内にあることがわかった。そして、大場氏から発掘調査との合意を得、早速補助事業の手続きをとることになった。よって、今回の調査もまた茶園改植に先立つ緊急の発掘調査として、記録保存を目的とした発掘調査である。

## 2. 調査の方法と経過

今回の調査区画は、任意に西側の地境を基本線とし、調査地内に5m方眼の区画を設けた（第3図参照）。設定した区画の南北線は、N-3°00'00"-Eである。調査では、この区画に従い遺物の取り上げ・遺構の検出位置確認・図面作成等を行った。

現地での図面は、遺構全体図については20分の1縮尺、主たる遺構ならびに遺物出土状況の平面図等は10分の1縮尺で作成した。写真による記録は、プロニーサイズ（6×7）原画白黒・35mmサイズ原画白黒・リバーサル撮影によった。

調査は、直刀の発見された付近のすでに削られた部分の土を観察したうえで、重機により畑耕作土の除去から行った。続いて、人工による掘削作業に入った。尚、調査区画の名称は南から呼称しているが、排土置き場の関係から遺構番号を北側奥から付け、掘削も北側奥の遺構から行った。以下、日を追ながら調査経過を記述する。

平成元年11月13日～11月14日 重機による調査区掘削

11月20日～12月19日 人工による荒掘削・精査・遺構確認・遺構掘削・写真撮影・図面作成

12月20日 調査区内片付け作業

12月25日～12月26日 重機による調査区埋戻し・整地作業



第2図 遺跡の周辺地形図

### 3. 遺跡をめぐる環境

高田遺跡の所在する和田岡原は、東側に流れる原野谷川により形成された河岸段丘である。この河岸段丘面を観ると、大きく二つの段丘面に分かれていることがわかる。和田岡原の内吉岡原と呼ばれる段丘面が上の段、高田原と呼ばれる段丘面が下の段である。標高値で観ると、上の段丘面は60m～50m代、下の段丘面は50m～40m代を測る。さらに細かく観ると、上の段丘面は北から南へと緩やかに傾斜するものの、等高線の粗密から60m前後と57m前後に小さな段差が認められる。下の段では50m代で一つ、47m前後で一つ、45m前後で一つと数段が確認できる。

さてこの段丘面から少し目を離し西側を観ると、南から北方向に入り込む大きな谷とそれから枝分かれした幾本もの小谷が吉岡原と高田原に入り込む様子が見て取れる。

また、高田原の北東側（原野谷川と高田原に挟まれた部分で、現在の吉岡の集落地）には、原野谷川の自然堤防に保護された肥沃な水田面が広がっていることもわかる。

上述した三つの地形条件は、高田遺跡をはじめとする和田岡原の遺跡群を育ませた大きな条件の一つであったと考えられる。

次に和田岡原に分布する遺跡の状況について、第1図と第2図とによって観てみたい。図中では、今回の調査で明かとなった遺跡の営まれた時代、弥生時代後期から古墳時代前期の集落跡・遺物散布地と現在知りうる古墳の分布状況を示した。特に第2図中には、これまでに行った発掘調査で当該時期の遺跡であることを確認した調査地点も書き加えた。説明すると、1は本調査地点で、後述するようすに弥生時代後期の住居跡3軒・掘立柱建物跡2棟そして小円墳状遺構と土壙墓群を検出した地点。2・3は、昭和60年度・昭和61年に行なった高田上の段遺跡の調査地点で、調査では1軒の住居跡を確認したのみであったが、集落としては東側段丘縁辺部に広がりを持つであろうことが想定された。同地点では直径13mを測る円墳の跡も確認している。4は、昭和61年に行なった吉岡原遺跡の調査地点で、住居跡6軒と掘立柱建物跡1棟、そして方形に近い形の古墳の跡と土壙墓3基を確認している。5・6は、昭和61年に行なった瀬戸山I遺跡の調査地点で、11軒の住居跡と5棟の掘立柱建物跡を群集した状況で確認している。7・8は、昭和62年度と平成元年に行なった高田遺跡の調査地点で、20数軒の住居跡と数棟の掘立柱建物跡、そして一辺10m近くある方形状の古墳1基を確認している。9・10は昭和57・59・62・63年度・平成元年と調査した女高遺跡の調査地点である。調査では、30数軒の住居跡と10棟ほどの掘立柱建物跡を確認し、さらに一辺18mを越える方形状の古墳1基を確認している。

これまでに行った調査の状況と地形状況とを考え合わせまとめてみると、次のような状況が窺える。  
①弥生時代後期から古墳時代前期に亘り営まれた集落跡は、和田岡原内陸部より比較的段丘縁辺部付近にその広がりを見る。  
②なおかつ東側縁辺部では現在の吉岡の集落地を見おろす一带に、また西側では南から入り込む谷の両側縁辺部で西の大きな谷を見守る一带に、集落は形成されている（のではないだろうか）。  
③調査により発見された古墳痕と現在確認できている古墳の立地を観ると、段丘縁辺部に築造されていることが多い。  
④これまでの調査では、和田岡古墳群を構成する墓跡形態として前方後円墳・方墳・円墳・小円墳・土壙墓など様々な形態を確認している。

これらの状況は、現況で確認し得る和田岡古墳群の構成状況をはるかに上回る大きな古墳群であったことを物語るものである。さらには、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて営まれた集落が多くあったが故に、この大古墳群が形成されたのである。

そうした、時代背景の中で高田遺跡は位置づけられる。

## II 調査の内容

調査を行う契機となった直刀の発見当时、調査を行うことにより藤六3号墳の実態が明らかにされることが期待された。ところが調査を行った結果、期待を裏切るように当該地点には古墳が存在しないことが明かとなった。その代わりに、古墳と言ふような大規模な墓とは異なる土壙墓6基と土壙墓とも言える小穴3基、そして小円墳状の遺構が2基確認できることは大きな成果であった。また、予想もし得ない状況で弥生時代後期に属する住居跡・掘立柱建物跡が確認できたことは、成果をさらに大きなものとした。

また、遺物においては出土点数は非常に少ないものの、内容では土器の他石製品・鉄製品等の種類が出土した。さらには整理作業により縄文時代早期に属する土器の発見があったことは、今次調査の成果をさらに豊かにするものであり、当該地域の歴史を探るうえで貴重な発見となった。

その具体的な内容について、以下遺構と遺物に項目を分け報告する。

### 1. 遺構（第3図～第23図参照）

今回の調査では、弥生後期に属する住居跡3軒と掘立柱建物跡2棟、そして古墳時代後期以降に属すると考えられる土壙墓6基・土壙墓とも考えられる小穴3基・小円墳状のもの2基、時代は不明であるが道状遺構1条その他の遺構多数を検出した。調査面積が狭い割には、密度の高い検出量であった。

この項では、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土壙、小穴、道状遺構、溝状遺構の順で報告する。

#### (i) 竪穴住居跡

##### S B 0 1（第4図～第6図）

調査区北域のA～B-9～10区に検出。S B 0 2と重複して検出。

平面の形状は楕円形で、規模は長径7m強×短径5m前後×確認面からの掘り方の深さ10～35cmを測る。床には、ロームブロックを含む土で叩き固められた貼床土で形成されていた。掘り方は、住居跡中央が他に比べやや低くなる。主柱穴は、S P 2-S P 4-S P 8-S P 1 0の組合せで、S P 2とS P 1 0とを結んだ線の中央とS P 4とS P 8とを結んだ線の中央とをつないだ中軸線の磁方位はN-21°-Wである。

炉は、この中軸線上の住居跡中央よりやや北寄りに検出。床面上に作られており、不整円形で直径35cmの大きさであった。壁溝は、床面上では確認できなかつたが、断面観察によりそれらしき落込みを確認しているので存在したと思われる。

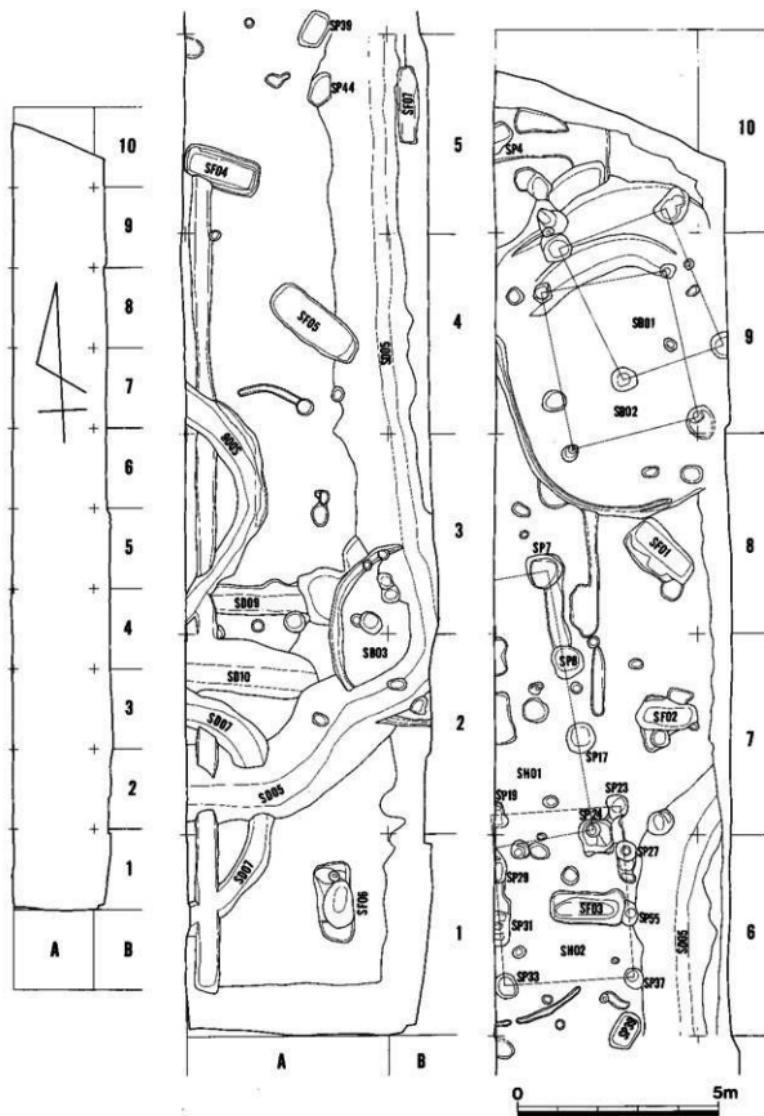
覆土の観察により、S B 0 1はS B 0 2より新しく建て替えられたものであることを確認している。

出土遺物は、第24図1～8の土器破片と19の石製品がある。

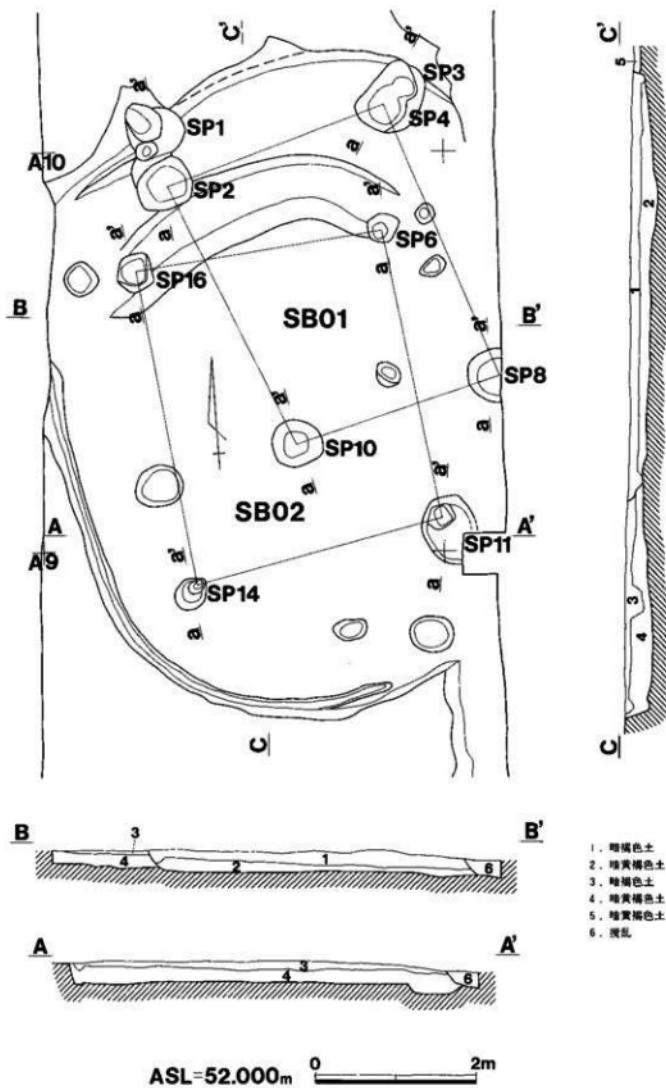
##### S B 0 2（第4図・第5図参照）

A～B-8～9区でS B 0 1と重複して検出。

床面で確認した壁溝により楕円形を呈すると考える。長径7m強×短径5m前後、確認面からの掘



第3図 造構全体図



第4図 SB01・SB02実測図

り方の深さは20~35cmを測る。掘り方は、住居跡北側域において溝状に一段低くなる箇所を確認している。床はロームブロックを含む貼床土で形成されていた。主柱穴は、SP16-SP6-SP11-SP14の組合せで、中軸線の磁方位はN-7°-Wである。

炉は確認していない。壁溝は、住居跡西城から南域において確認した。

出土遺物は、第24図9~11の小破片である。

#### SB03 (第7図参照)

調査区南域のA-B-2~3区に検出。東側部分が調査区域外におよんでおり、SD05により断ち切られている。

平面の形状は、不明であるが橢円形になるものと思われる。規模もまた全貌を知り得ないが、南北間で4m50cmを測る。床は、ロームブロックを含む土により貼床が施されていた。炉は検出していない。壁溝は、検出および残存した範囲においてすべて確認した。柱穴は、深いものは確認できなかつたが、検出した位置からSP6とSP2あたりが相当するものと考えられる。

第7図中に示した3~6がSB03の覆土に当たる。出土遺物は第24図12の土器で、西壁寄りに押し潰れた状態で、床面近くに出土した。

#### (ii) 挖立柱建物跡

#### SH01 (第8図参照)

A-7~8区で、調査区西壁際に検出した。

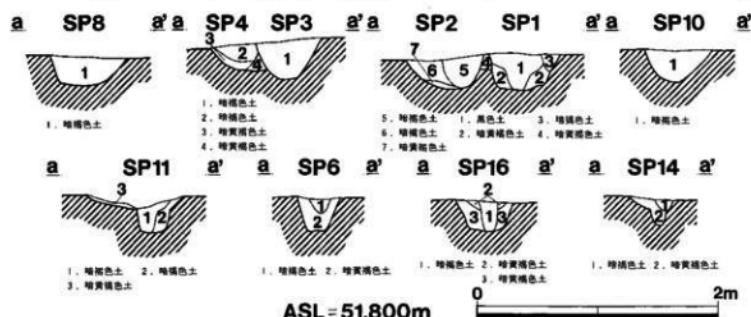
SP7-SP8-SP17-SP24の柱穴列が相当する。これらに対応する柱穴列は調査区内に確認できなかったことから、西側調査区域外に求められる。

建物の間口は不明・奥行き3間で、柱穴間の距離はSP7-SP8が2m30cm、SP8-SP17が2m、SP17-SP24が2m30cmを測り、中のSP8-SP17が短い。柱穴を結ぶ線の磁方位はN-6°-Wである。

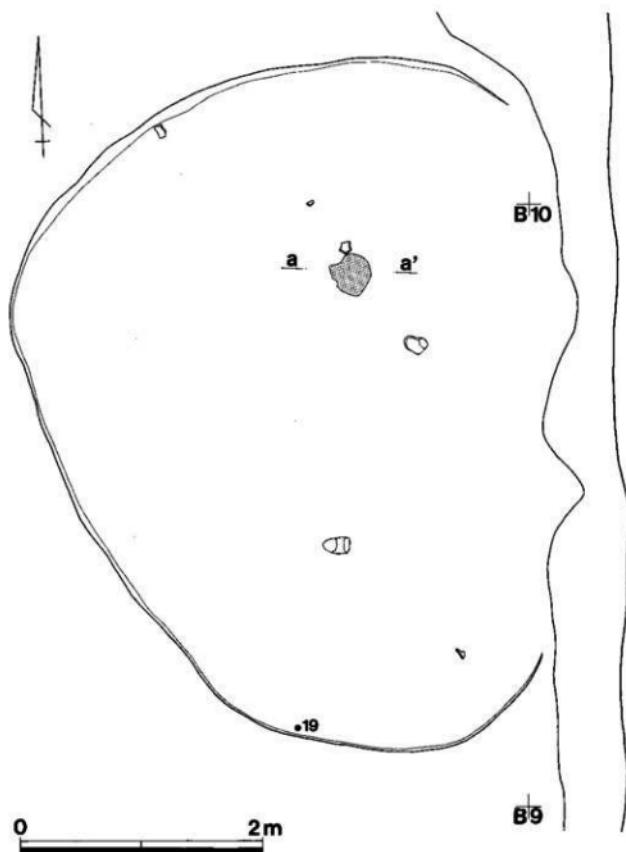
出土遺物は、小破片があるが弥生時代後期から古墳時代前期に属すと考える。

#### SH02 (第9図参照)

SH01の南側A-6~7区の西壁に接して検出。SP19-SP29-SP31-SP33の柱

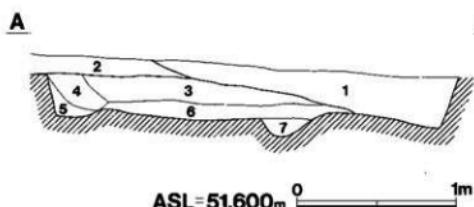
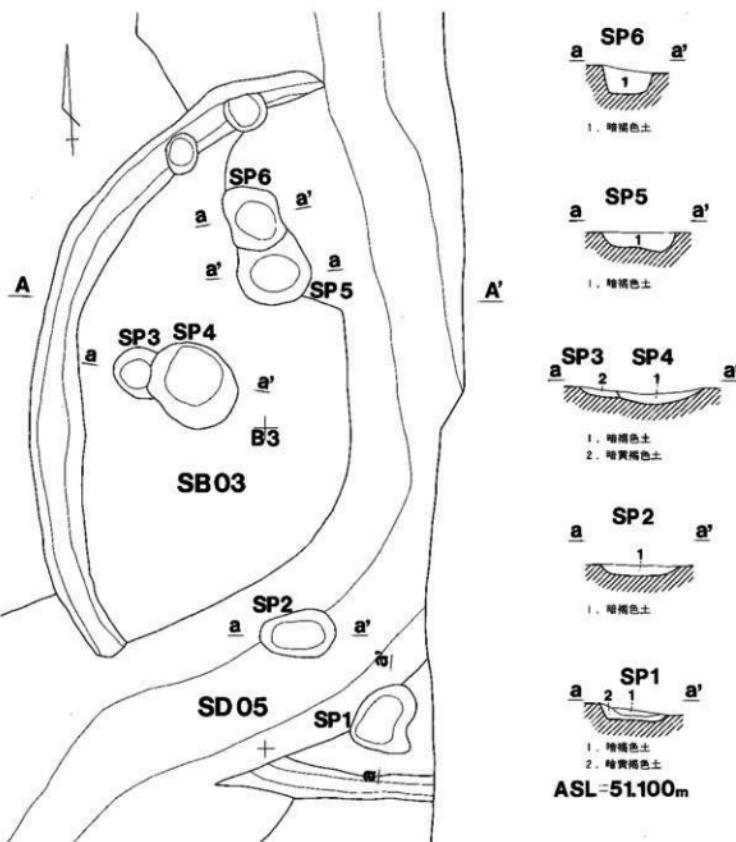


第5図 SB01・SB02 Pit土層断面図

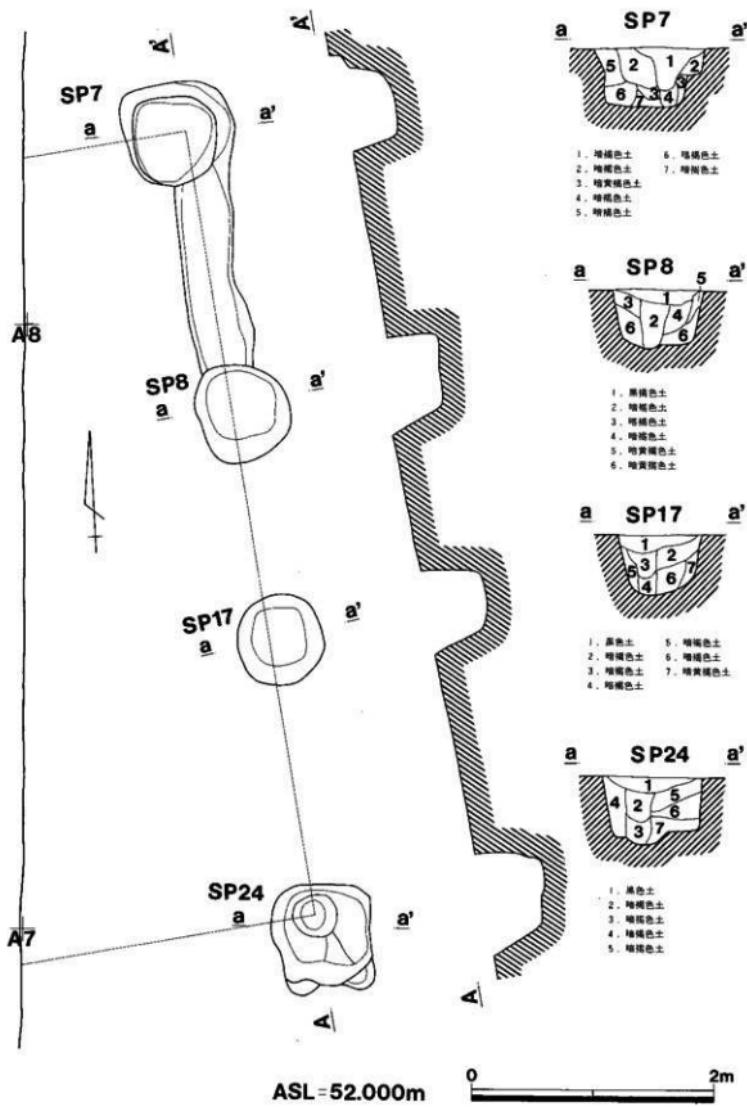


ASL = 51.800m      0      0.5m

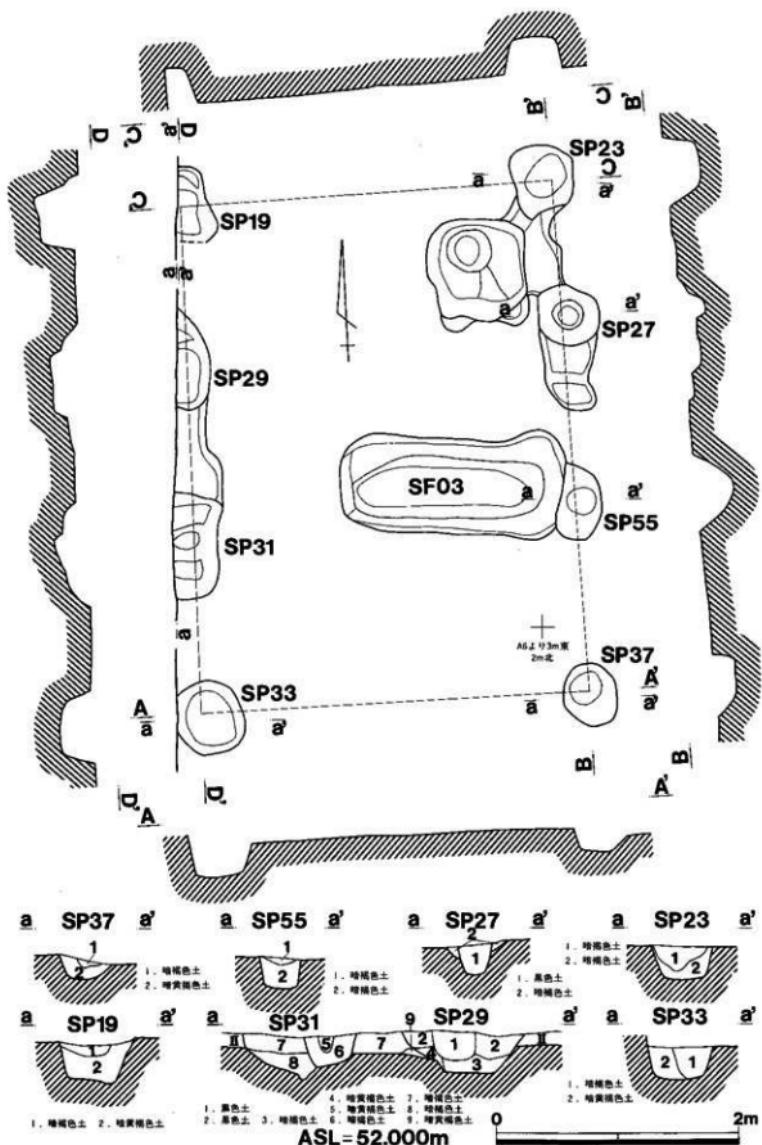
第6図 SB01実測図



第7図 SB03実測図



第8図 SH01実測図

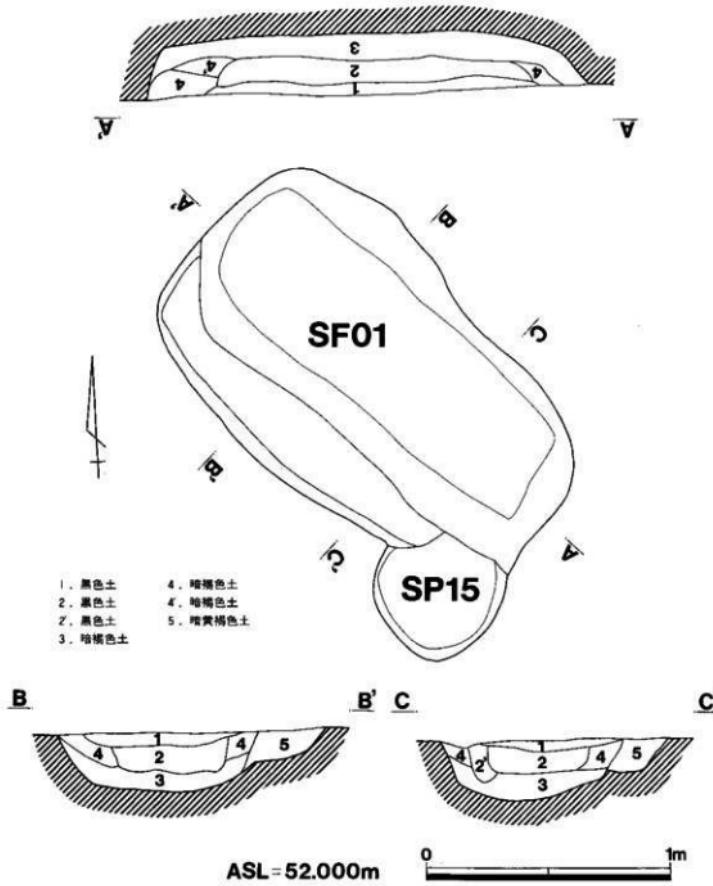


第9図 SHO2実測図

穴列とSP23-SP27-SP35-SP37の柱穴列により構成される。

建物の広さは間口1間・奥行き3間で、柱穴間の距離（柱穴中心から中心の距離）は次のとおりである。SP19-SP29が1m20cm、SP29-SP31が1m50cm、SP31-SP33が1m50cmを計り、SP23-SP27が1m20cm、SP27-SP55が1m50cm、SP55-SP37が1m50cmを測る。そして、SP19-SP23が3m、SP29-SP27が3m20cm、SP31-SP55が3m30cm、SP33-SP37が3m20cmを測る。柱穴南北方向の磁方位はN-1°-Wで、ほぼ現在の北を向く。

各柱穴の規模は、SH01のそれに比べ小さく浅い。建物規模もSH01より小さい。



第10図 SF01実測図

(iii) 土 壤

S F 0 1 (第10図参照)

A-8区に検出。平面形は長方形で、南西側に中段をもつ。掘り方の規模は、確認面で長さ1m84cm・幅1m前後・深さ25cm前後・テラスの深さ10cm程を測り、下場では長さ1m60cm前後・幅55cm前後を測る。長軸方位はN-45°-Wである。

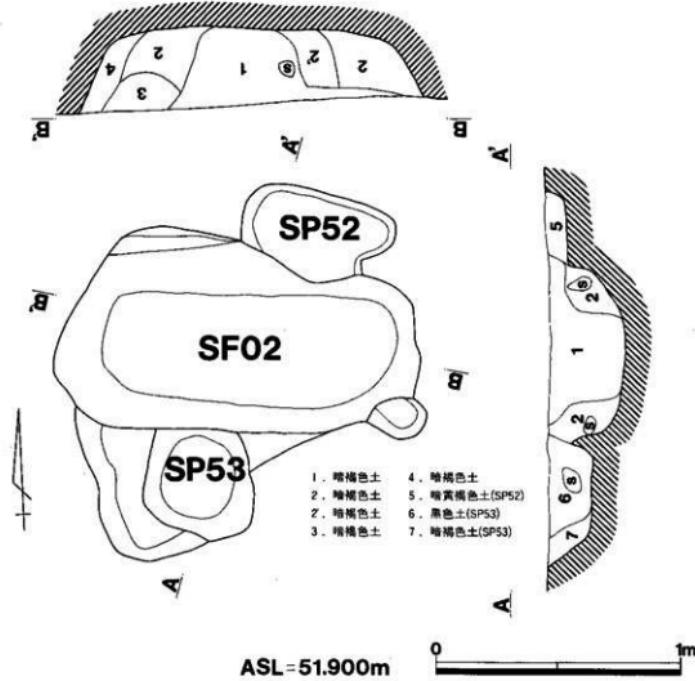
土層観察では、2が棺の部分に相当するものと考えられ、その長さ1m20cm~30cm・幅40~45cmが想定される。

出土遺物は無い。覆土の水洗いによっても出土しなかった。

S F 0 2 (第11図参照)

A-7区に検出。不整長方形で、確認面での規模は長さ1m50cm・幅65~80cm・深さ25~30cmを測り、下場での長さ1m20cm前後・幅45cm前後を測る。長軸方位はN-84°-Wでほぼ西を向く。

土層観察で、棺の様な状況は確認していない。ただ2は、棺の裏込め土とも考えられる土であった。出土遺物は無く、覆土の水洗いによっても出土しなかった。



第11図 S F 0 2 実測図

#### S F 0 3 (第1 2図参照)

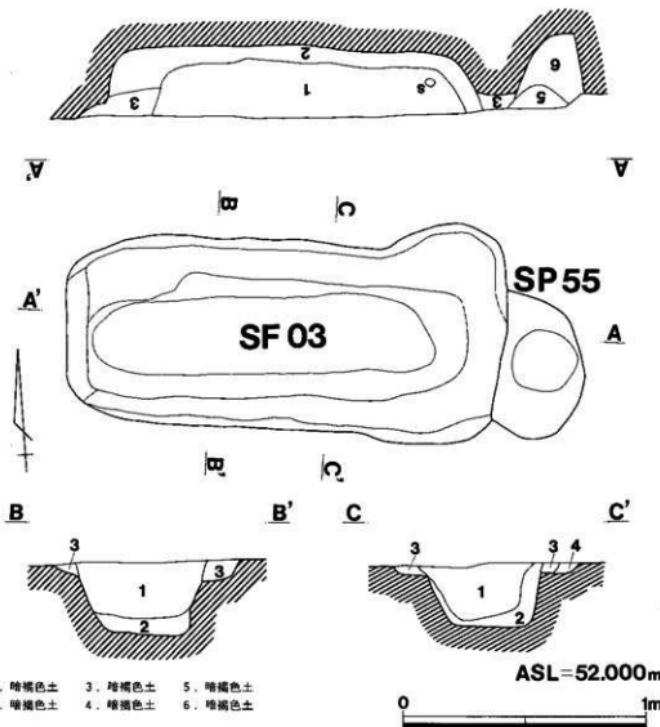
A - 6 区に検出。平面の形は長方形で、主体部の周囲に幅10~15cmのテラス状の平場を巡らしている。確認面での長さ 1 m80cm・幅75~80cm、中央部の掘り込みの長さ 1 m57cm・幅45~50cm・深さ30cmを測る。下場での長さは 1 m40cm前後・幅30cm前後の大きさを測る。長軸方位はN-85°-Wを測り、S F 0 2とほぼ同じ向きの西に向く。

出土遺物は無く、覆土の水洗により出土した玉類もない。

#### S F 0 4 (第1 3図参照)

A - 5 区、調査区の西壁に接して検出した。平面の形は長方形で、S F 0 3 同様主体部の周囲に幅5cmのテラス状の平場を巡らしている。確認面での長さは 1 m98cm・幅90cm・最深部40cmを測る。掘り方下場での長さは 1 m55cm・幅50cmを測る。長軸方位はN-70°-Wである。

土層観察では、4が棺に相当すると考えられ長さ 1 m40cm・幅30~40cmを測る。出土遺物は、第25図20に示した刀子片が南東隅で出土。その他土器小破片で、覆土の水洗から玉の出土はなかった。



第12図 S F 0 3 実測図

S F 0 5 (第14図参照)

A-4区に検出。東側の一部をSD05により削平されていたが、かろうじて掘り方底面は残存していた。平面の形は長方形で、確認面での長さ2m50cm強・幅90~100cm・深さ30cm前後を測る。掘り方の下場での大きさは、長さ2m20cm・幅80cm前後を測る。長軸方位はN-48°-Wである。

土層概観で2が棺に相当するものと考えられ、長さ1m70cm・幅60cm前後を測る。

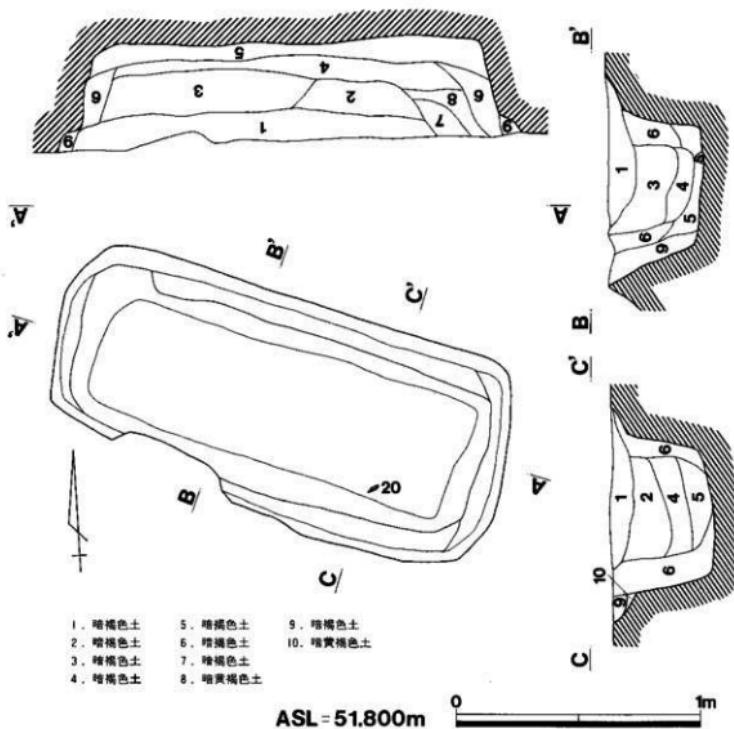
遺物は土器の小破片の出土があり、覆土の水洗によって玉などの出土はなかった。

S F 0 6 (第15図参照)

調査区の南域A-1区に検出した。平面での形は長方形であるが、掘り方の状況から土壤墓的な構造とは想えないものである。

確認面での長さは1m97cm・幅85cm前後で、長軸方位はN-1°-Wでは北を向く。

出土遺物は無く、覆土の水洗によっても玉等の出土はなかった。



第13図 S F 0 4 実測図

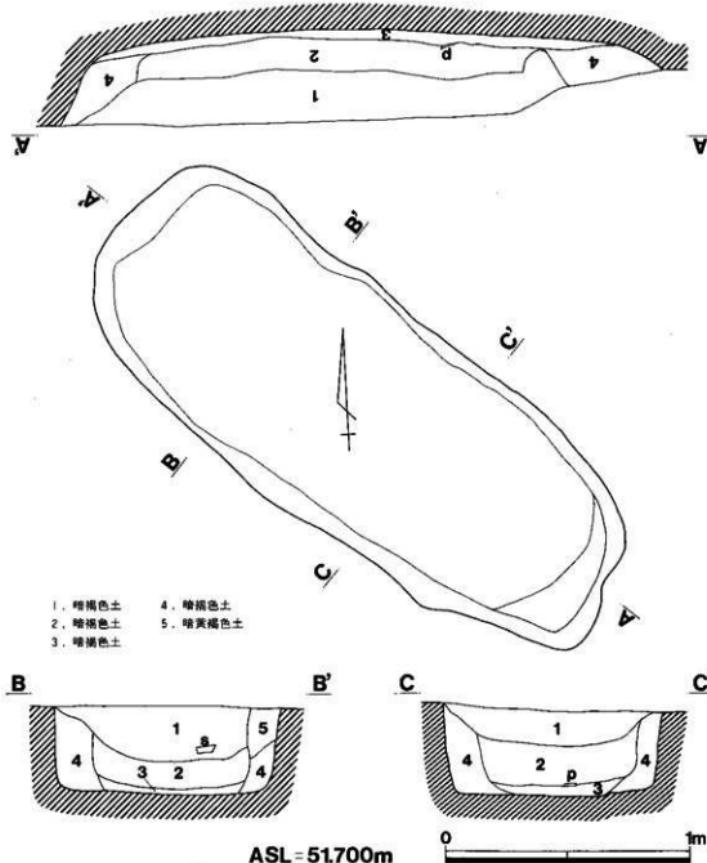
S F 07 (第16図参照)

調査開始の契機となった直刀（第25図25）の出土した土壙で、B-5区に検出。土壙は直刀出土時に東壁の一部を消失。

平面の形は長方形で、確認面での長さ1m85cm・幅40~50cm・深さ西壁で10cm東壁で5cmを測る。掘り方の下場での大きさは、長さ1m75cm前後・幅30cm強である。長軸方位は、ほぼ北を向く。

調査で直刀が第16図中点描部分から出土したことが確認できたが、この土壙からこの他刀子（第25図22）と鉄製の鎌（第25図21）が出土した。覆土の水洗から玉などの出土はない。

覆土観察で棺らしき土を確認しているが、その大きさは定かでない。



第14図 S F 05 実測図

(iv) 小穴

**S P 4** (第17図参照)

調査区北西隅のA-10区西壁際に検出。半分ほどが調査区域外におよぶものと思われる。

平面の形は不明であるが、S P 3 9並びにS P 4 4と同規模の長方形を呈すものと考える。穴の大きさと長さは不明であるが、幅60cm前後下場での幅40cm前後・確認面からの深さ35cmを測る。長軸方位はS P 3 9・S P 4 4と同一形状とすればN-67°-Eである。

覆土中には多量の礫が含まれており、それらを除去したその下から刀子(第25図23)が出土した。礫の出土状況から、礫は穴の上に積まれていた様子が窺える。

以上の状況から、S P 4は小穴というよりも小土壙としたい。

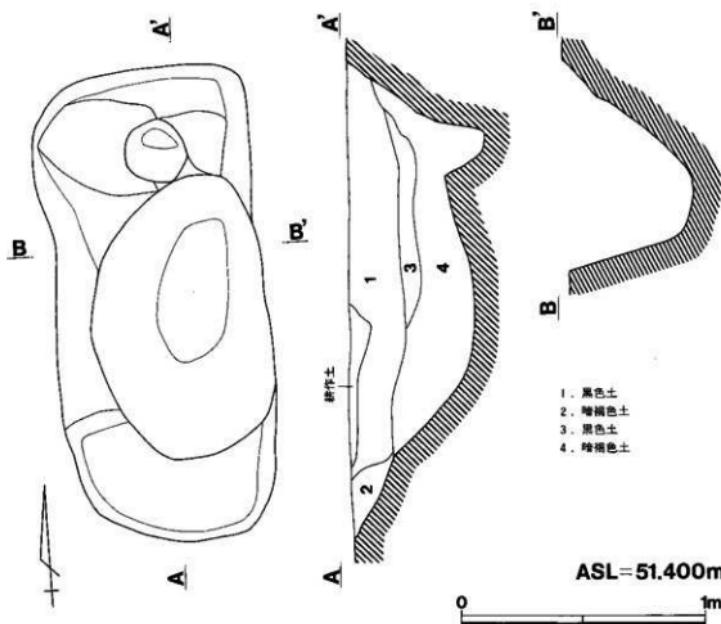
**S P 3 9** (第18図参照)

A-5~6区で、SD 0 5際に検出。

平面の形は長方形で、確認面での長さ95cm・幅63cm・深さ15cmを測り、下場での長さは78cm・幅45cmを測る。長軸方位はN-40°-E

覆土からの出土遺物は無い。覆土の水洗による出土遺物も無い。

穴の形状から、S P 3 9は小穴というよりも小土壙としたい。



第15図 S F 0 6 実測図

S P 4 4 (第18図参照)

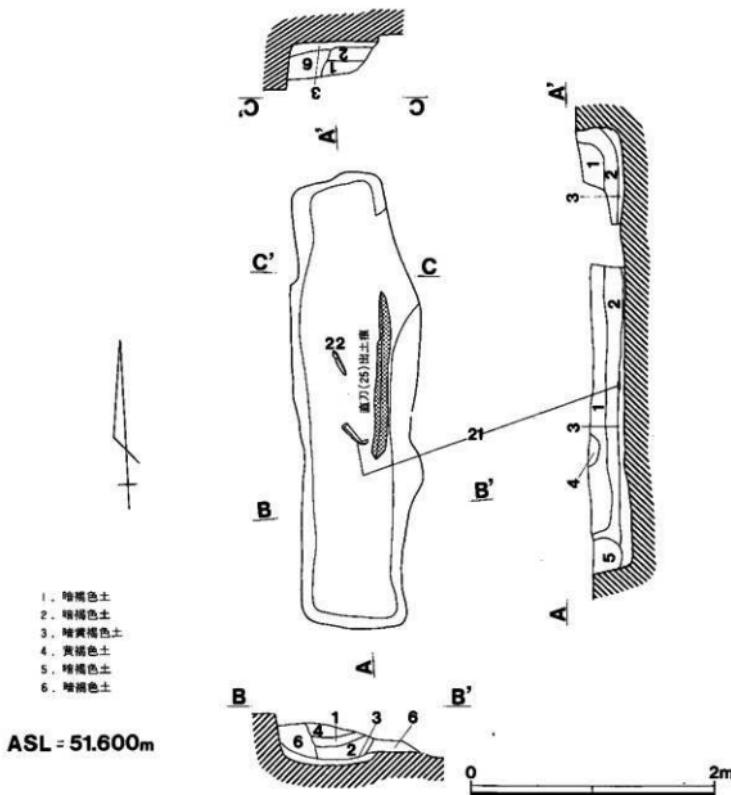
A-5区でSD05に一部削平された状況で検出した。したがって、東壁の一部は確認できなかつた。

平面の形は、長方形になるものと考える。穴の大きさは、確認面で長さ85cm・幅55cm・深さ15cm程度を測る。また掘り方下場での大きさは、長さ75cm・幅35cmである。長軸方位はN-36°-EでSP39のそれに近い。

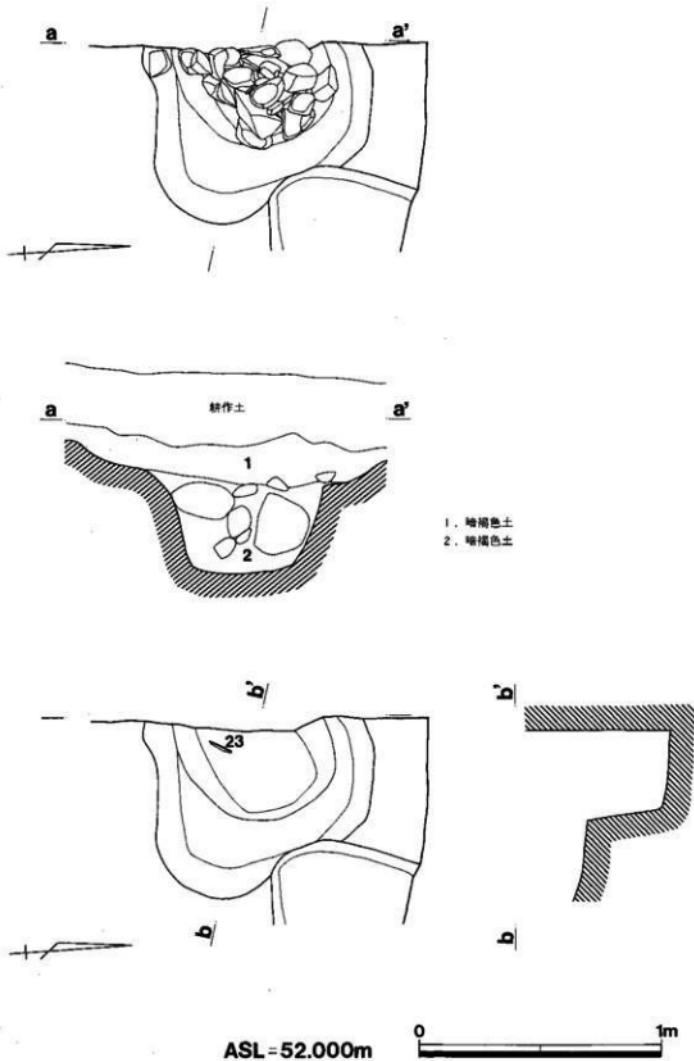
覆土は、1がSP44のもの、2がSD05のものである。

覆土からの遺物は、穴の北東壁際底部から刀子(第25図24)が出土しており、穴の北西壁際には比較的薄い縁が壁に張り付いた状況で出土している。

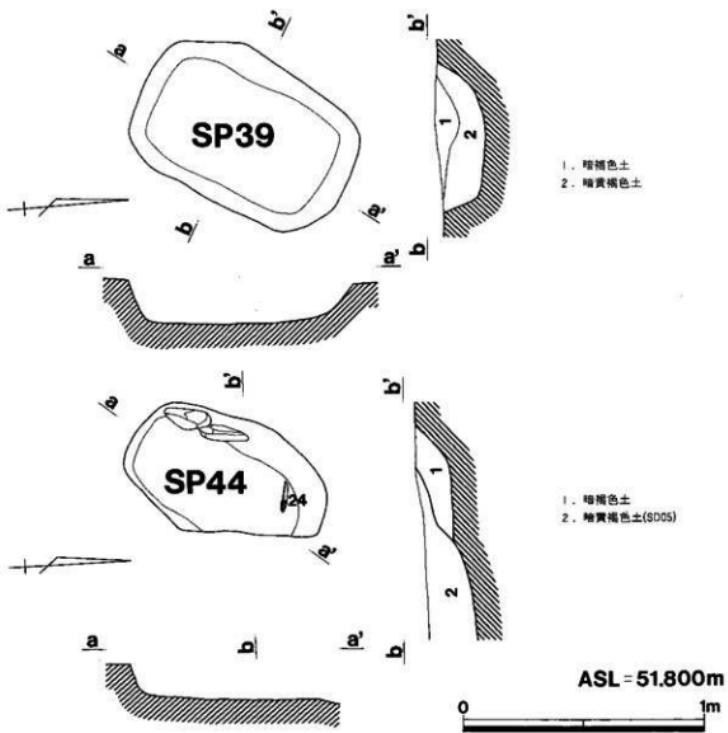
以上の状況から、SP44もまた小穴というより小土塙としたい。



第16図 SF07実測図



第17図 SP 4 實測図



第18図 SP39・SP44実測図

#### (v) 溝状遺構

##### SD 05 (第19図・第20図参照)

A-2区の西壁から東向きに出、B-3杭付近で北に向きを変え、B-7杭付近でまた東に向き調査区東側に出ていく。

溝の幅は確認面で1m50cm~2m、下場で30~50cmを測る。

等高線による観察ではB-3杭付近において最も深くなり、水の流れる溝としたならば不都合をきたすものと考えられる。公図で並走する赤道は無いが、覆土の状況から道状遺構と考えたい。

A-2区からは多量の拳大の礫が集中して出土しており、その下から第24図17の陶器片が出土した。

##### SD 06 (第21図参照)

A-3~4区の調査区西壁際に弧状に検出。形状から高田遺跡地内に所在する東上口古墳群に見られるような小円墳に伴う周溝の可能性がある。また溝は、西壁際に掘られた耕作溝により一部寸断されていた。

溝の幅は確認面で60~80cm、下場で南側が狭く20cm前後・北側で50cm前後を測る。推定される小円墳の大きさは、溝内側下場間で直径5m前後である。

覆土観察によると、2がSD 09で4~9がSD 06であることから、南側で切り合うSD 09との新旧関係はSD 09の方が新しいことがわかる。

##### SD 07 (第22図参照)

A-1~2区の調査区西壁際に弧状に検出。形状からSD 06同様小円墳に伴う周溝の可能性がある。また溝は、西壁際に掘られた耕作溝により南側と北側で、そして中央でSD 05により寸断されて確認した。

溝の幅は確認面で60~90cm、下場で40~50cm前後を測る。推定される小円墳の大きさは、溝内側下場間で直径5m前後である。

覆土観察から、SD 05との新旧関係はSD 05の方が新しいことを確認している。

##### SD 09 (第23図参照)

A-3区に検出した溝で、調査区西壁から東向きに直進しSD 05により寸断される。

平面の形は直線状で、確認面で幅70cm前後・深さ7~8cmを測り、下場で幅40cm前後を測る。

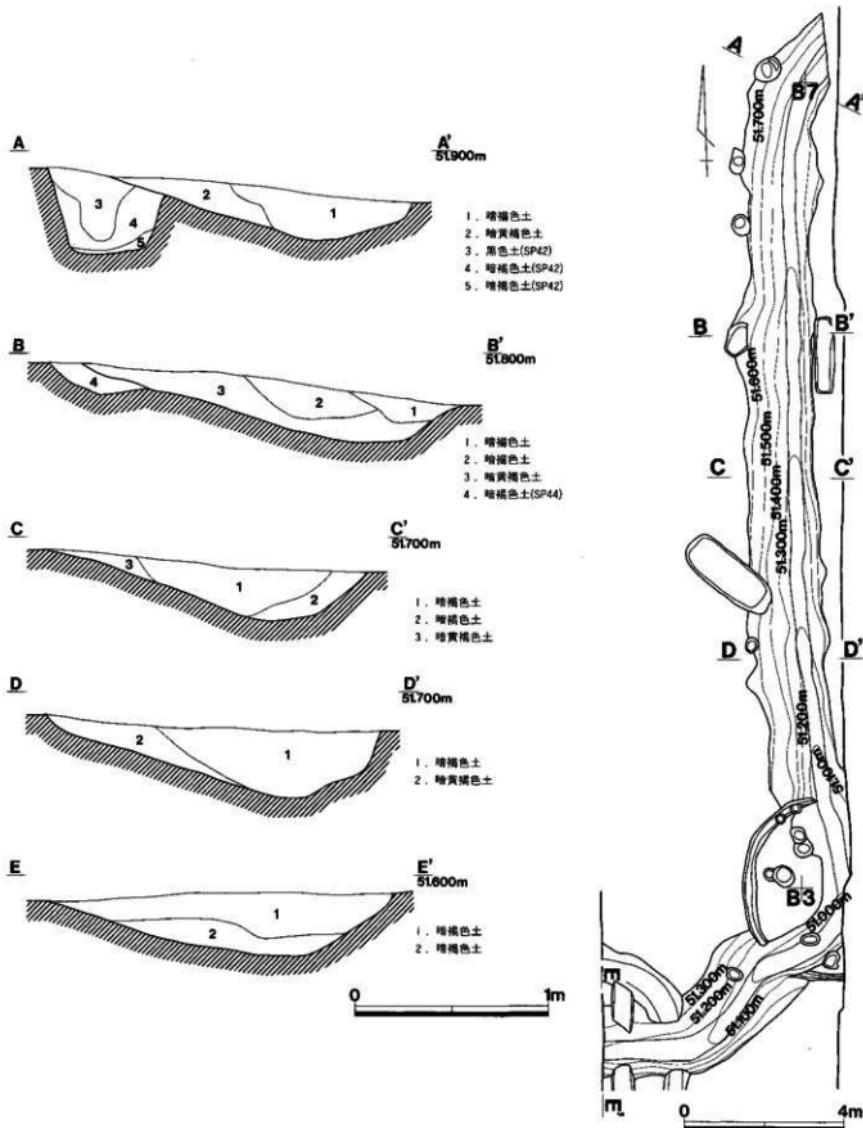
第23図中の土層断面図では、1がSD 09の土、2・3がSD 06の土、4がSD 10の土、5・6がSD 07の土を示す。調査における土層観察から、SD 09はSD 06・SB 03よりも新しく、SD 05よりも古いことを確認している。

##### SD 10 (第23図参照)

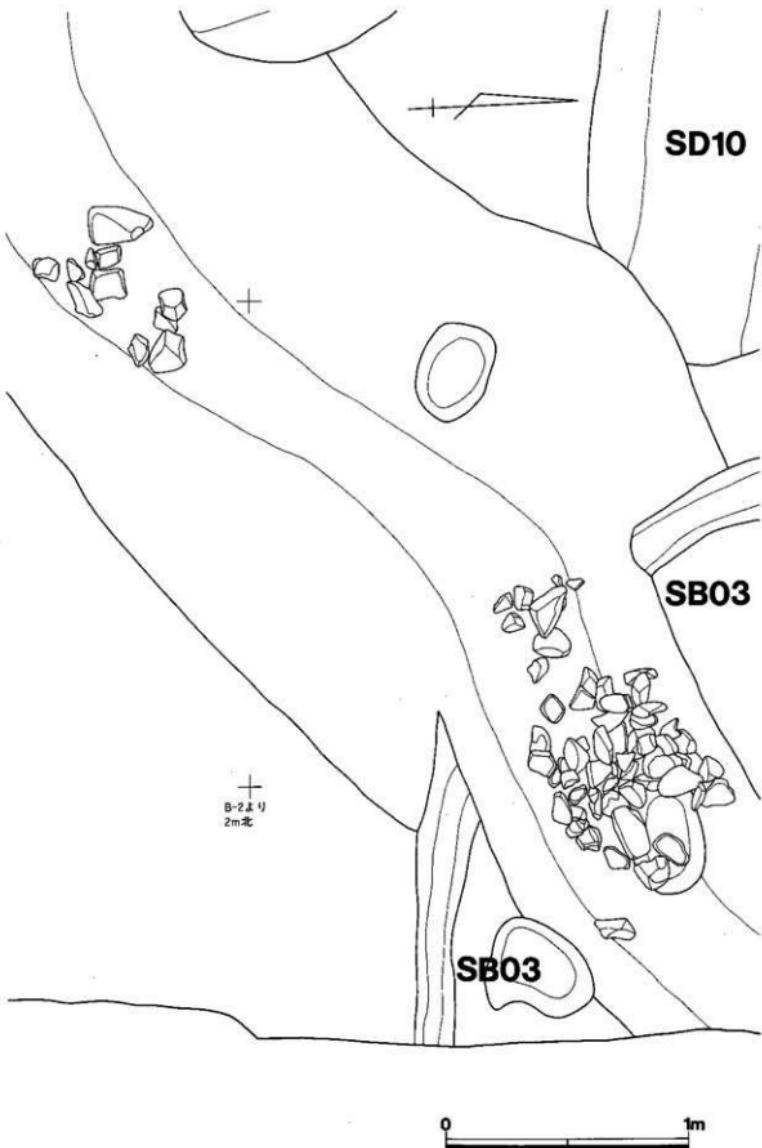
A-2区に検出した溝で、SD 09と並走し同様に調査区西壁から東向きに直進しSD 05により寸断される。

平面の形は直線状で、確認面で幅1m30cm・深さ5cm前後を測り、下場で幅40~50cmを測る。

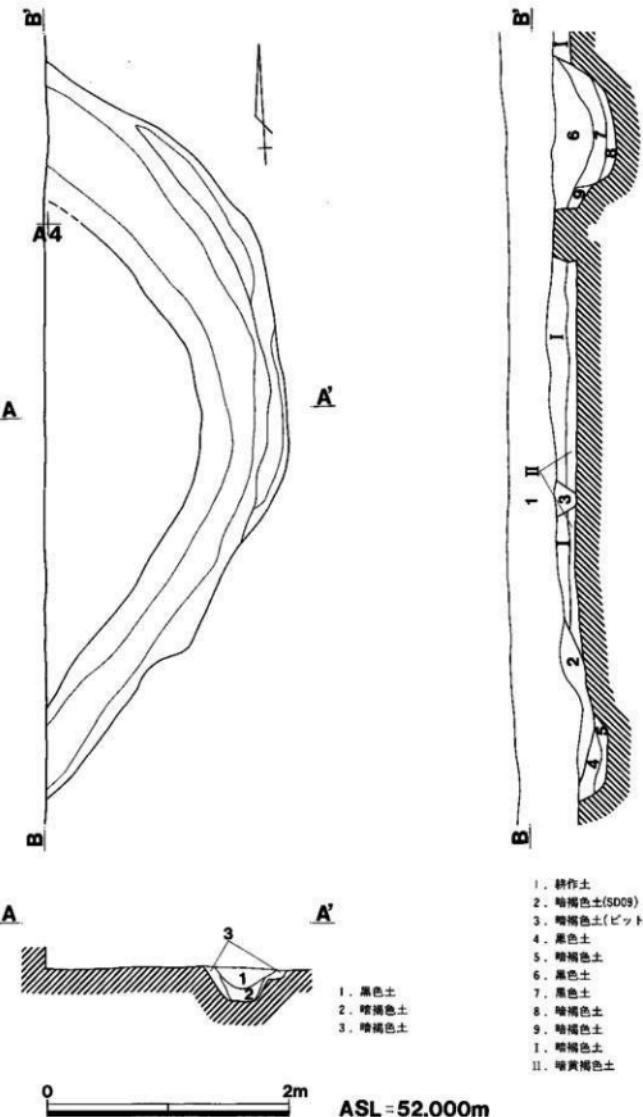
土層観察から、SD 10はSD 07よりも新しく、SD 05よりも古いことを確認している。検出した規模がわずかであるので確実でないが、SD 09とSD 10は同じ機能する溝と考えられる。



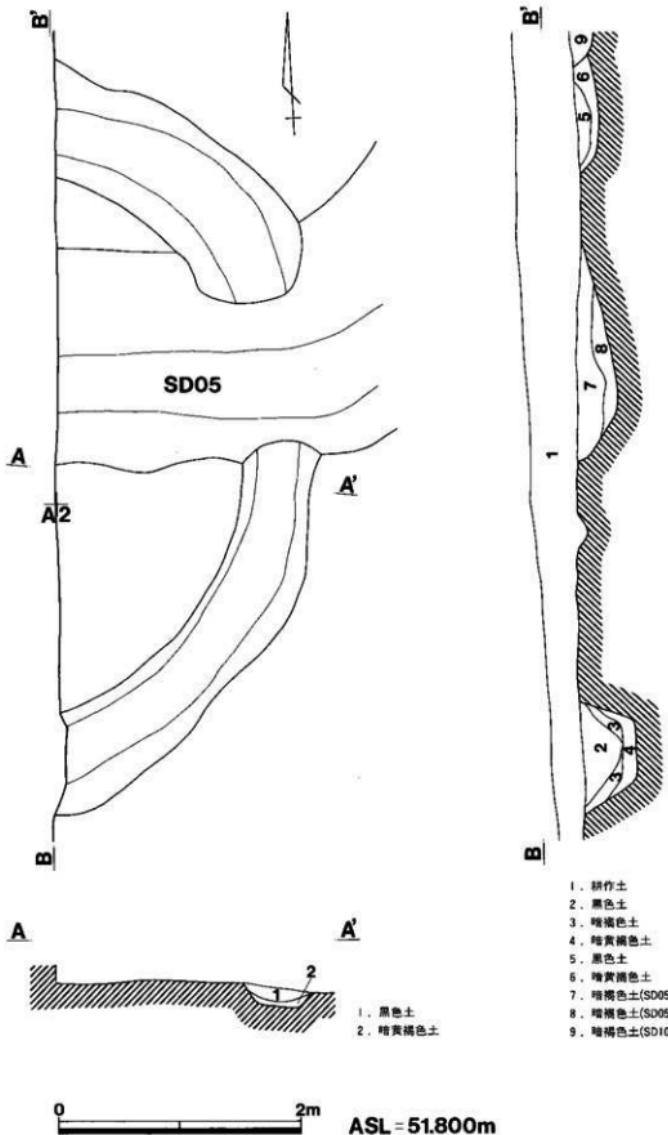
第19図 SD 0.5 察測図



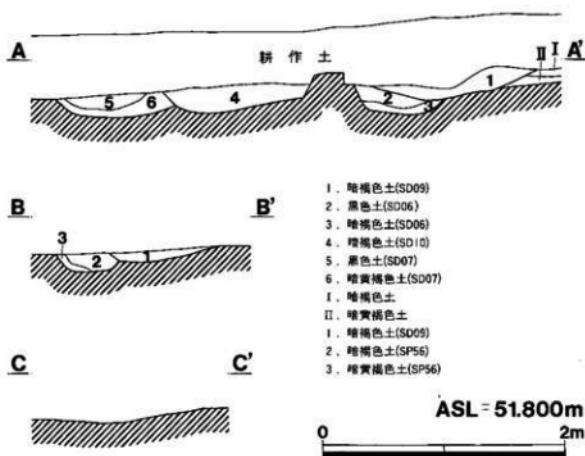
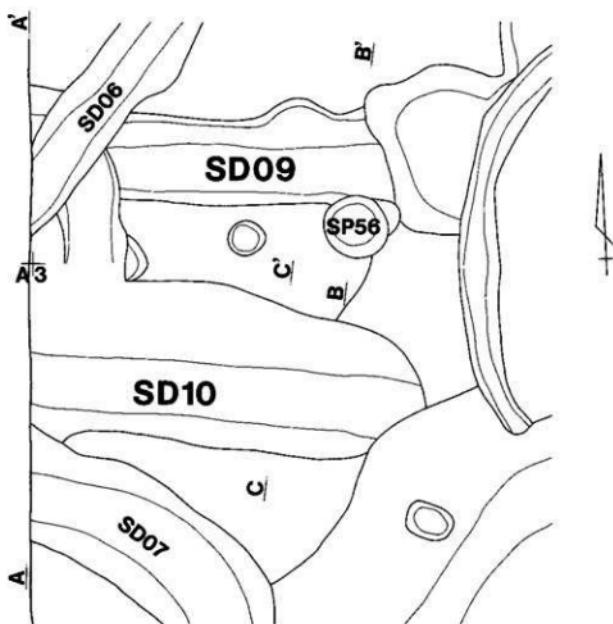
第20図 SD05 遺物出土状況図



第21図 SD 06 実測図



第22図 SD07 実測図



第23図 SD09・SD10実測図

## 2. 遺 物

今回の調査で出土した遺物は、土器・鉄整品・石製品で総量的には極めて少ない。土器についてはその多くが破片あるが、図化に耐え得るものは、可能な限り図化し掲載した。

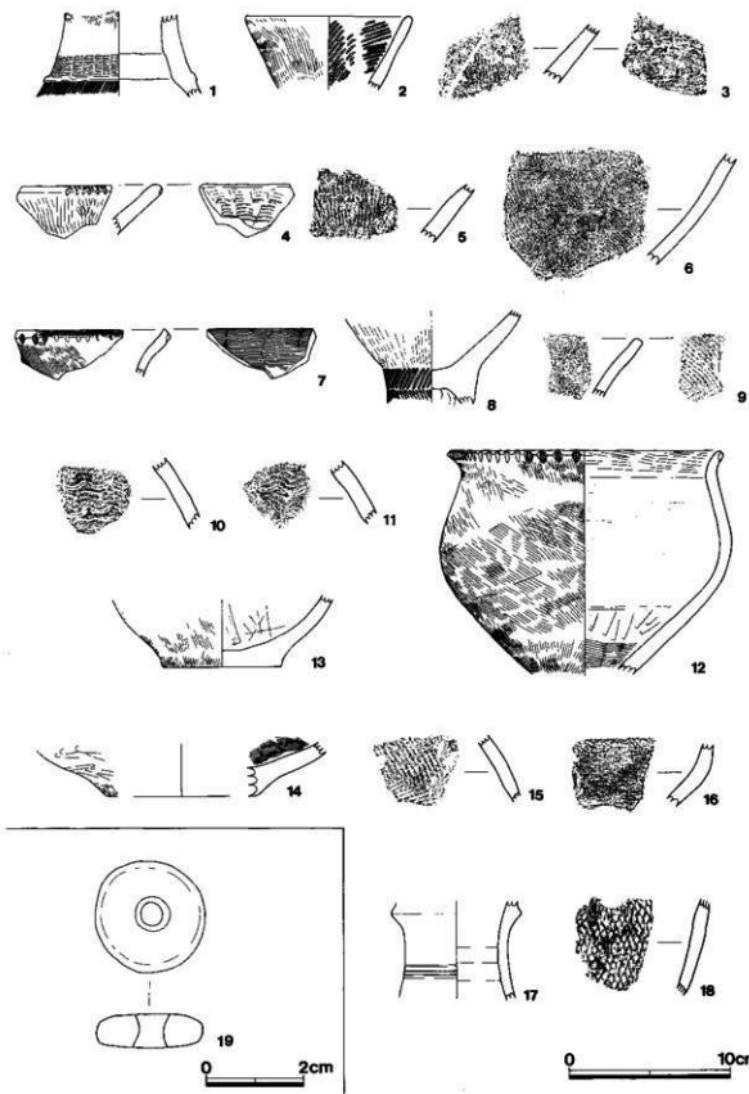
ここでは土器・その他の遺物（石製品・鉄製品）の順で説明していく。

### (i) 土 器

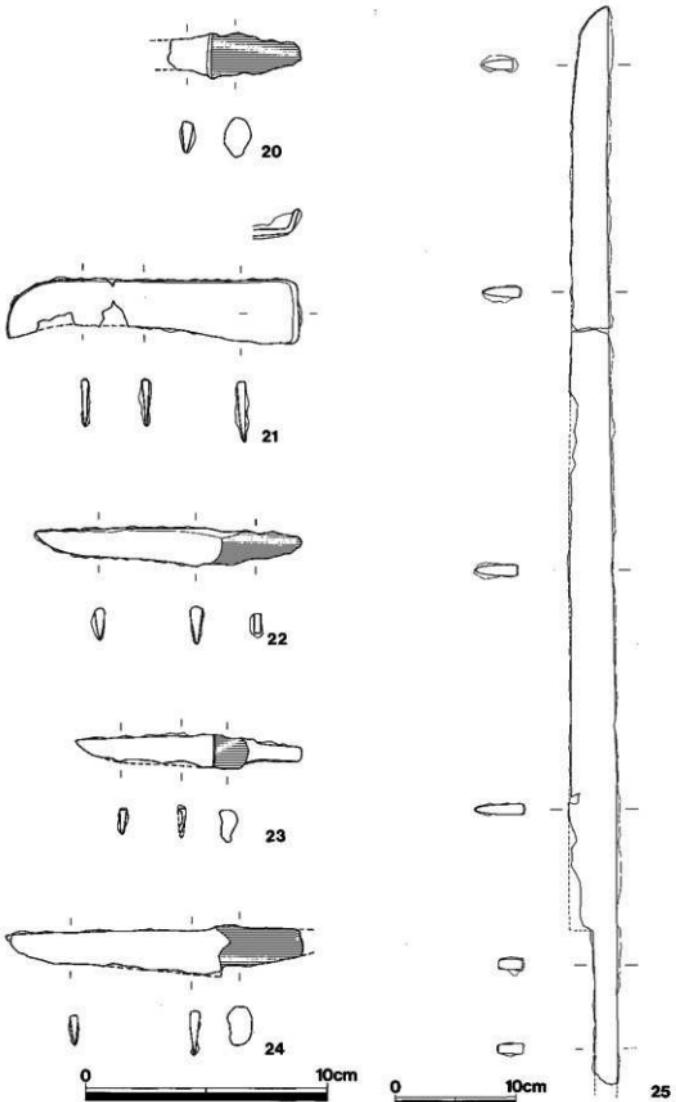
出土土器を時代的に観ていくと、弥生時代後期（菊川式）～古墳時代前期に属されるものが大半を占める。1～8はSB01からの出土である。1は壺形土器の頸部片である。上部は縦ハケー横ナデが、下部には櫛描波状文が施されており、その下に1cm程の凸帯を挟んで櫛刺突羽状文が施される。2は壺形土器の口縁部片である。外面には縦ハケ、内面には単節（LR）の斜縞文が施される。3は壺形土器の口縁部片であるが、口唇部を欠損する。外面には斜位のハケが、内面には櫛描波状文が施される。4は壺形土器の口縁部片である。口唇部には坦面を設け、そこに単節（RL）の斜縞文とキザミが施される。口縁部には縦ハケが施される。内面には櫛描波状文が2段に亘って施される。5・6は台付壺形土器の胴部下片である。いずれも縦・斜位のハケが施される。7は台付壺形土器の口縁部片である。口唇部には坦面を設け、そこに櫛描波状文とキザミが施される。口縁部には斜位のハケが施される。内面には横位のハケが施される。8は高杯形土器の杯底部片である。杯部外面には縦ハケが、脚部との接合部には櫛刺突羽状文が2段に亘って施される。9～11はSB02からの出土である。9は壺形土器の口縁部片である。外面は縦ハケ、内面には単節（RL）の斜縞文が施される。10・11は壺形土器の肩部片であるが、同一個体の可能性もある。どちらも櫛描波状文が施される。12はSB03から出土の台付壺形土器である。脚部を欠損する。口唇部には坦面を設け、そこに入念なキザミが施される。口縁部から胴部全面に縦・斜位のハケを施す。内面には口縁部に横ハケ、胴上半部にはナデ、下半には板ナデ、底部では横ハケが施される。13はSF04から出土の壺形土器の底部片である。外面にはミガキ、底部周辺では縦ハケ後、ナデ消しされる。内面には板ナデが施される。14もSF04から出土の壺形土器の底部片で、外面にはミガキ、底面付近では縦ハケ後ナデ消しされる。内面にはハケが施される。15・16はSP54からの出土である。15は壺形土器の肩部片で上部にRL、下部にLRの単節斜縞文が施される。16は壺肩土器の胴部片で、下半に弱い稜をもち、ミガキが施される。17はSD07から出土の陶器壺頸部片である。口縁部との境で三角の突出をもち、頸部下半で細い3本の沈線がめぐる。釉薬は青緑色で透明度は高い。18はネガティブの楕円文と確認できる押型文土器である。胎土中には長石・雲母が微量に含まれ、生焼けのような青灰色を呈す。出土地点は、A-3区耕作溝とSD06が交わった付近で、遺構は確認し得なかった。

### (ii) その他の遺物

19はSB01出土の用途不明の石製品である。直径2.3cm、厚さ0.7cmを測る。全体に丁寧に研磨されている。中央には円形の有孔が両面から穿孔されており、直径0.7cmを測る。20はSF04出土の刀子片で、現存長5.5cmを測る。茎部に木質が残存する。21はSF07出土の鉄鎌で、全長12.2cmを測る。刃部の幅は、基部近くで25cm、中央で2cmを測る。折り曲げ部分の長さ1cmを測る。木質の残存はみられない。22はSF07出土の刀子で、現存長11.1cmを測る。関は明瞭でない。刀身は完存である。茎部に木質が残存する。23はSP04出土の刀子で、全長9.4cm、刀身部長5.7cm、刀身部幅1.2cmを測る。茎部には木質が残存する。24はSP44出土の刀子で、現存長12.1cmを測る。切先部分と茎部の一部を欠損する。刀身の中央部分の刃部は研磨によりやせ細っている。25はSF07出土の大刀で、現存長90.4cm、刀身部長77.2cmを測る。



第24図 出土遺物実測図(1)



第25図 出土遺物実測図（2）

### III ま と め

調査の項目でも述べたとおり今回は狭い範囲での調査であったが、弥生時代後期の住居跡・掘立柱建物跡・古墳時代以降の土壙墓・近世の道状遺構等検出した遺構の種類も豊富で、大きな成果をあげることができた。

ここでは、再度それらをまとめ、今後の課題としたい。

1. 「掛川市遺跡地図」によると、当該地点に「藤六3号墳」の所在が記されているが、調査ではそれを示す状況を確認できなかつた。しかし現地の地形では、古墳が所在した様な地彫れが観られるところから、他にその所在が求められる可能性がある。

2. 調査区の北側域と南側域において弥生時代後期に属する住居跡を検出したこと、中央区において掘立柱建物跡2棟を検出したことにより、本地点周辺に当該時期に営まれた集落が存在することが確実となつた。これらの建物では立て替え状況が認められるので、集落は時間幅をもって営まれたと考える。

3. 土壙墓6基・土壙墓とも言える小穴3基・小円墳状の遺構2基の検出は、その状況から時期は定かでないが周辺の集落の墓域として利用されたことを意味するものである。同時に当該地点が和田岡古墳群の中にあってどの様な意味を持つのか、今後の大きな課題となる。

4. 3. に関連して、上記遺構の構築時期について出土遺物から定かとすることができなかつたが、和田岡古墳群の他の墓（盛土をして地上高く盛り上げる高塚古墳）と区別されるこれらの遺構はどのような性格をもつのか。SD07のように直刀までも副葬するという状況は、何を意味しているのか。今後「古墳を考える」上での好資料となる。

5. また調査で確認した小円墳の地上での高さを計算すると、

直径5mの小円墳で地表から溝の幅1m・深さ80cmとして、溝掘削により出る土量は

$$(3.5 \times 3.5 \times 3.14 - 2.5 \times 2.5 \times 3.14) \times 0.8 = 15.072 \text{ m}^3$$

地表での円の直径を調査確認面での大きさよりも少し小さく4mと考えると、その円の面積は

$$2 \times 2 \times 3.14 = 12.56 \text{ m}^2$$

この上に先ほどの土量を積み上げると

$$15.072 \text{ m}^3 \div 12.56 \text{ m}^2 = 1.2 \text{ m} \text{ の高さとなる。}$$

これは、本地点周辺に所在する東登口古墳群の小円墳と同一規模であることを示す。したがって、和田岡古墳群を考えるに当たり、これら小円墳の位置付が今後大きな課題としてあげられると考える。

6. 整理作業を進める中で、縄文時代早期「押型文土器」を確認した。これは、当該地点における新発見であり、当地域における歴史を書き改めることとなつた。現地調査では、該期の遺構について確認することはできなかつたが、今後の調査での留意点とし付近の歴史を語る上での資料として役立てたい。



図 版





調査前近景(南から)



調査区実掘全景  
(南から)



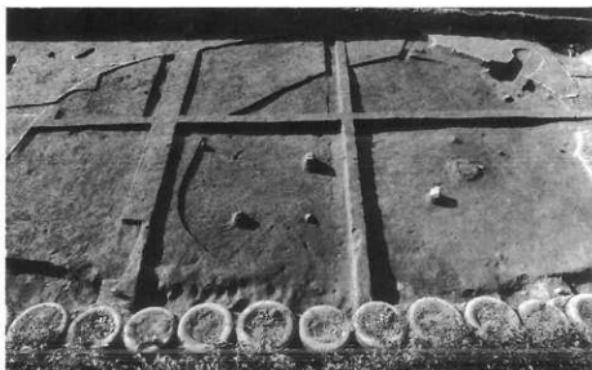
調査区完掘全景  
(北から)



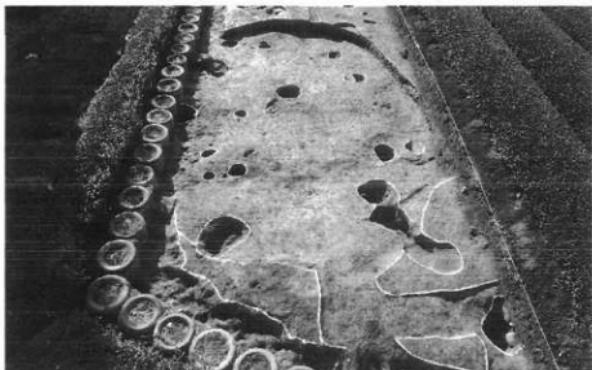
重機稼動風景(掘削)



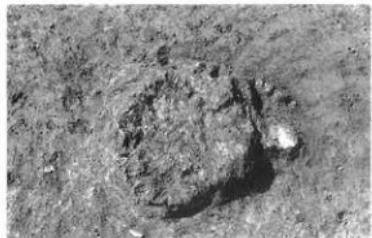
重機稼動風景(埋戻し)



SB01・SB02床面検出状況  
(東から)



SB01・SB02床面検出状況  
(北から)



SB01 炉



SB01 炉 (先端)

図版  
IV



SB03完 据



SB03出土遺物近景



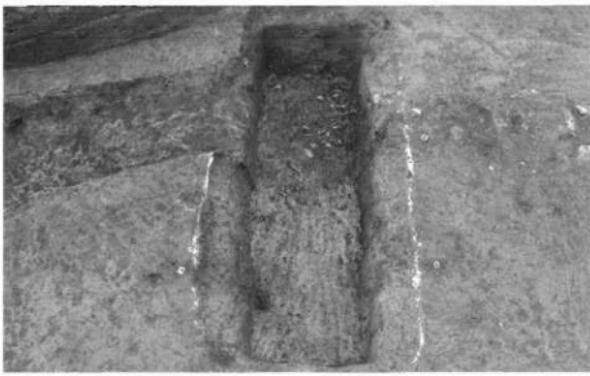
SF01完 据  
(南東から)



SF02完掘(東から)



SF03完掘(南から)



SF04完掘(南東から)



SF05実掘(南東から)



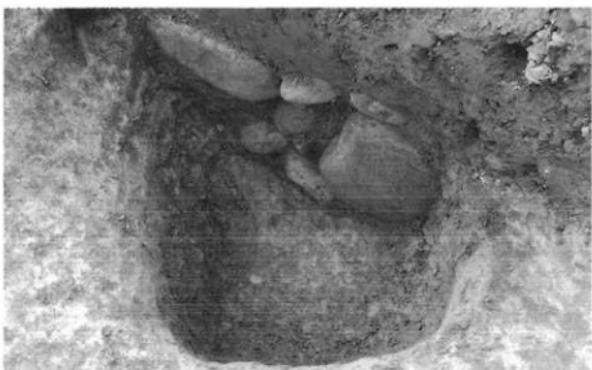
SF07実掘(東から)



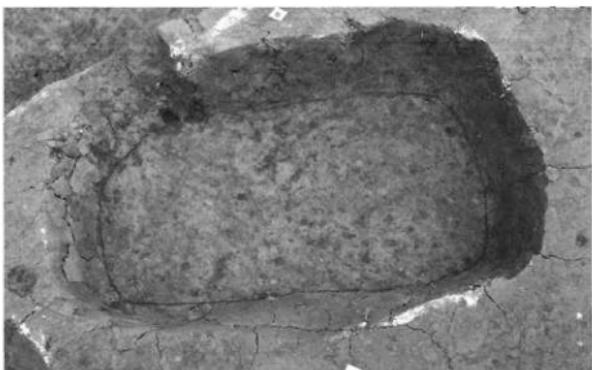
SF07遺物出土状況



SP4検出状況  
(東から)



SP4発掘(東から)



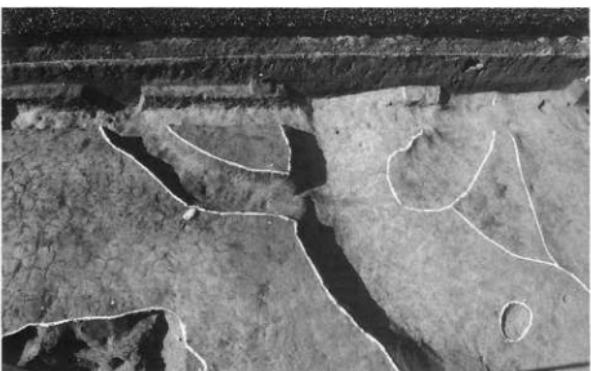
SP39発掘(北西から)



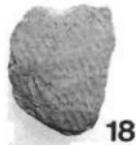
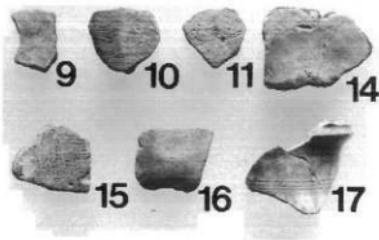
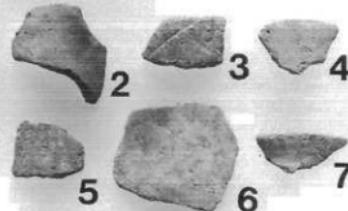
SP44遺物出土状況  
(北西から)



SD06完掘(西から)



SD07完掘(東から)





19



20



21



22



23



24



25

蘿六3号墳・高田遺跡

発掘調査報告書

1990年3月31日

編集発行 掛川市教育委員会  
掛川市水堀51  
TEL (0537)24-7773

印刷所 株式会社 三創  
静岡市中村町166-1  
TEL (0542)82-4031





